

座談会

海外プロジェクトへの
参画とその魅力

コーディネーター

小泉 幸弘氏 (JICA 資金協力業務部実施監理第一課長)

参加者

中村 仁司氏 (株長大海外事業部副技師長)

浜崎 大輔氏 (株長大海外事業部海外技術2部主査)

北田 郁夫氏 (三井住友建設(株)ヤンゴン事務所長)

金重 順一氏 (三井住友建設(株)土木本部土木設計部
土木設計グループ課長)

1. 概要

2015年10月28日、日本の無償援助により2015年4月に開通したカンボジアの「つばさ橋」を取り上げ、国内とは異なる環境における苦労や海外プロジェクトならではの魅力を紹介する座談会を開催した。

2. 各スピーカーの発言要旨

中村：未知との出会い、異文化との出会い

海外業務はコンサルタントが主体的に関わることができ、期間も長いため、責任も重いが達成感が大きい。また、自然条件が大きく異なる中で設計する醍醐味がある。メコン川は雨季と乾季で6~7mも水位が変化、河岸の浸食も大きいことから250m浸食されてももつ設計にしている。海外業務の魅力は異文化との出会い、自分たちの技術で自己実現を図ることにある。

浜崎：計画から完成まで携わる橋梁への愛着

韓国仁川大橋の主塔設計に関わり、スケールの大きさに感動したこと、パプアニューギニアの橋梁調査で住民の期待の大きさを直に知ったことから海外業務を志した。つばさ橋は、計画、設計、施工監理、完成まで携わり愛着が強い。主桁断面に施工、景観に優れるエッジガーダーを採用したが、耐風安定性の確保に苦心した。

北田：海外プロジェクトの難しさとやりがい

つばさ橋は雨季になると周りが水没するために十分な余裕を持って施工計画を立てる必要があった。杭基礎工事中に不発弾が爆発するという事故があり、工事が4カ月間中断した。海外では、余裕のある資機材労務調達計画、当事国の法制度・商習慣の理解、契約管理・クレーム交渉能力等が必要になる。

金重：シビルエンジニアとしての誇りを実感

メコン川は25mの大水深、増水期の流速は5ノットにも達した。場所打ち杭を施工した年は40mも浸食されヤードも水没した。圧倒的な自然と工事の大きさ、土木は社会に貢献できるというシビルエンジニアの誇りを実感できるのが魅力と思う。

小泉：途上国におけるプロジェクトの課題

事業実施までに環境社会配慮、住民移転などが問題となった。事業仕分けの時期と重なったため、国内では本事業に多くの反対があったが、途上国の経済発展の速さを考えると適切なタイミングで事業実施を判断することが必要。最近中国の進出が著しいが、いい仕事をすることで日本の技術力を示していくことがとても重要と思う。

3. ディスカッションの主なやりとり

北田 日本の強みは、工期管理や安全管理が優れていることにある。海外工事に従事できる技術者を育てていくことが価格競争力につながると感じている。

中村 無償援助の入札が不調になるのは、海外プロジェクトの魅力が伝わっていないことも要因の一つである。

金重 技術基準に関しては、日本の基準適用が望ましいが、求められている基準に対応していくのが基本。

小泉 日本企業が参加しやすいよう、調査・計画の段階から日本基準の採用を求めていくことが大きな方針。



おわりに

海外展開していく上で、日本の技術者が海外に目を向けて、それを行政がサポートしていくことが重要である。海外を志向する若手技術者が増えることを期待したい。

(文責：国土交通省道路局企画課国際室企画専門官 田中 衛)